

学位申請論文

『日本靈異記』の人々とその思想【要旨】

関口 一十三

【目次】

序

第一章 靈異記説話を支える人々

第一節 優婆塞・沙弥・行者

第二節 法師・沙門・僧・禪師

第三節 知識・檀越

第二章 靈異記説話の倫理と道德

第一節 儒教と仏教―『日本靈異記』における「孝」の問題―

第二節 道教と仏教―飛天にみられる女性の救い―

補論 神道と仏教―大祓の詞の成立と日本古代の薬師経受容―

第三章 靈異記説話の他界・周縁認識

第一節 四国

第二節 九州

第三節 野・海・山・河

序	1
第一章 靈異記説話を支える人々	14
第一節 優婆塞・沙弥・行者	17
第二節 法師・沙門・僧・禪師	40
第三節 知識・檀越	75
第二章 靈異記説話の倫理と道德	94
第一節 儒教と仏教―『日本靈異記』における「孝」の問題―	98
第二節 道教と仏教―飛天にみられる女性の救い―	125
補論 神道と仏教―大祓の詞の成立と日本古代の薬師経受容―	143
第三章 靈異記説話の他界・周縁認識	168
第一節 四国	171
第二節 九州	188
第三節 野・海・山・河	210

【要旨】

『日本国現報善悪靈異記』（以下『靈異記』と略す）は、奈良薬師寺の僧景戒によって撰述された、日本最古の仏教説話集である。本稿の目的は、奈良時代末期から平安時代初期というこの時代に、なぜ本書のような書物が編まれたのかということを考えることである。それは、景戒を含むこの時代の人々が物事をどう考え、何に関心を持ったかという人の心の側の問題としてとらえるということでもある。

『記紀』や『風土記』は王権によって整序された世界を描いたが、『靈異記』は仏教という新たな秩序でもってこの世界を意味づけようとした。その過程において、同じく伝来してきた新しい知識である儒教や、共同体が以前から持っていた信仰は仏教的世界の中に包括され取り込まれていった。そのような変革期を生きた人々が心の深層で何を感じていたかを読み解いていく。

第一章は「靈異記説話を支える人々」と題して、僧尼の私度官度の枠組み以外の視点で、『靈異記』の世界を成り立たせているものについて考えていこうとしたものである。その可能性の一つとして、『靈異記』に登場する人々の呼称と行業を整理、検討していった。

第一節では優婆塞を中心に、沙弥・行者について取り上げた。優婆塞は一般的に在俗の仏道修行者と理解され、歴史学では正倉院文書に見られる「優婆塞貢進文」の研究により、その官軍予備軍的性格が明らかにされてきた。しかし『靈異記』に見られる優婆塞はそれとは明らかに異なり、山林修行者の性格を持つ。また、同じ在俗の修行者としてある沙弥は菩薩の変化という像を持ち、優婆塞とは一線を画す。行者という呼称は、優婆塞や沙弥のような身分上の呼称ではなく山林修行のような特異な修行を行い験力を得た者に対する尊称であり、優婆塞だけでなく禪師などにも使われる。

第二節では法師を中心に、沙門・僧・禪師という呼称を見ていった。法師は僧と並んで仏道修行者に対して使われる

もつとも一般的な呼称である。後世、法師という呼称は侮蔑的な意味を含むようになるが、『靈異記』にはその傾向はほとんど見られない。ただ、歴史上、太政禪師と呼ばれた道鏡が本書では一貫して法師という呼称しか使われていないことから、禪師という呼称に対する『靈異記』の特殊な観念が伺え、それとの比較において法師という呼称の本書における位置も比定できる。

第三節では知識・檀越という仏教を支援する人々を取り上げた。檀越は、造寺や造仏において中心となって寄進を行う有力信者のことである。史書によってこの時代、檀越による寺の私物化が横行していたことがわかるが、『靈異記』は化牛説話という話型でそうした問題を描きながらも、私物化を行った者に対して決して檀越という呼称を使わない。本書で檀越と呼ばれるのは敬虔な信者のみである。よって、『靈異記』における「檀越」という呼称は、信者としてあるべき姿を体現している人物に与えられる尊称としての意味合いが強いと考えられる。また、「知識」は特定の目的のために組織される一時的な信者集団で、「檀越」のように説話自体に大きく関わることはない。しかし、彼らのような人々こそが民衆のもつとも一般的な姿であり、本書の主たる教化の対象であった。『靈異記』説話の多くは、仏道修行者たちの持つ靈験やその支援者が目撃した奇跡を描くことによって成立している。言い換えれば、本書は彼らによって支えられているのである。

『靈異記』には、多くの仏道修行者の呼称が見られるが、それはこの時代、民間にさまざまな修行者たちがいたということを意味する。身近に仏道修行者たちを見るようになった人々の仏教に対する関心の高まりが、『靈異記』のような書がこの時代に編まれる背景にあったのではないか。その書名があらわすように、まさにこの時代の「靈異」への関心がここにあらわれている。

第二章は「靈異記説話の倫理と道徳」と題して、倫理や道徳といった、仏教・儒教・道教の混在から生まれた当時の

規範意識について考えていった。『靈異記』が描いた雄略天皇（五世紀後半）から嵯峨天皇（九世紀前半）という時代は、仏教が公伝し、すでに伝来してきていた儒教や日本の在来信仰などと影響しあいながら、平安時代へと続く日本文化の基礎を創造していった時代であった。薬師寺の僧である景戒が編纂した本書が、仏教の因果応報思想を基盤とした仏教説話集であることに異論はないが、その中に仏教という枠組みを超えた説話がいくつも見られる。

第一節では親子関係を語る説話の整理から、儒教の「孝」の問題を考えていった。『靈異記』の親子関係説話は母子間の話が圧倒的に多い。それは儒教の「孝」が父子の関係を担保しているのに対し、母子におけるそれがなかったためではないか。現在の状況はすべてなんらかの過去の報いであると言う因果応報の思想は、現在過去未来にわたる己一つまわり個を強く自覚させる。そしてその自覚は己とは何かという問いを己に課す。その結果、家族は最も近い、けれども己とは違う一個の他者となり、自明であった親子の情愛やその関係性に理由が必要となってしまう。そのような中で語られたのが、『靈異記』の一連の不孝譚であり、母から子に対する「乳の値」の請求であり、前世の債権者の生まれ変わりである討債鬼による、育児という労働を通しての子から親への債務の返済要求であった。

第二節では儒教と並びこの時代の思考に大きく影響を与えた外来の思想として、道教を取り上げた。日本には道教の寺院である道観や道士が存在したことを示す確実な記録はないが、『万葉集』『風土記』などから道教の神仙思想が当時広く受け入れられていたことがわかる。『靈異記』の中にも神仙的説話はいくつかあるが、貧女が仙草を食べて飛天したという上一三はその代表的なものである。なぜこのような話が仏教説話集である本書に取り入れられたのか。仙人になるということが、当時の仏教において往生の一過程と見なされていた可能性がある。上一三は在俗でしかも仏道修行を行っていない女性も、清く正しい生活を行えば救いが得られることを語っている。

補論は、『靈異記』とは直接関係はないが、同時代的な問題として、奈良時代末期に書かれた最初の薬師経注釈と神

道の大祓の詞の成立との関係を書いた論文を収めた。大祓の詞の天津罪・国津罪が現在ののような形になるまでには、何段階かの変遷を経ていると考えられる。『古事記』に起源を持たない国津罪のうち、「白人」「こくみ」「畜仆し蠱物する罪」「高つ神の災」「高つ鳥の災」「昆ふ虫の災」に関しては以前から薬師經典の影響が指摘されていたが、本稿では、それらの罪の編入過程と薬師経受容の過程を比較検討することにより、日本古来の信仰と考えられがちな神道が、仏教の影響なども受けながら成立していったことを証明している。

第三章は「靈異記説話の他界・周縁認識」と題し、『靈異記』に見られる空間認識を考えていこうとしたものである。『靈異記』に見える地名は、東は陸奥から西は肥後に及ぶ。近年、主に歴史学によつて本書の説話群の分布の偏りや、伝承の過程や実態が明らかにされつつあるが、なぜそれらの話がその地方の話として語られたのかという問題については十分に答えておらず、表現を支える空間認識のあり方を検討する必要がある。

第一節では、四国地方に関する説話を取り上げた。本書における四国は、蘇生と転生という、前世と現世のあわいの出来事が起きる地として描かれている。北海道の終点である土佐や伊予は特に特殊な像を持たされており、それは南海浄土思想とも重なるところがある。

第二節では、九州地方に関する説話を取り上げた。九州地方に関する話は七例しかない。しかしそのうちの三例が蘇生譚であり、九州も四国同様に境界としての像がある。また、話の分布に特徴があり、『靈異記』に収められた話はずべて大宰府を中心とした北九州地方の話である。九州の持つ境界像は、天孫降臨や、熊曾・土蜘蛛といったまつるわぬ者との神話を抱える南九州地方が『靈異記』の時代未だこの世での他界の像を保ち続けていることを示している。

第三節では、村や里といった人が生きていく空間の外、つまり人の生活を囲む空間である野山や海についての考察を行った。用例が飛び抜けて多かったのは「山」で、記紀神話から続く異郷としての像をふまえつつ、仏道修行の場とい

う空海などの平安新仏教へとも繋がっていく要素が確認できる。また、天皇の狩猟が仏教の殺生戒や慈悲心という観点から問題提起されており、仏教の浸透によって「山」だけでなく天皇像にもゆらぎが生じている。「山」と対となる異郷幻想に「海」が有る。『靈異記』は「海」を教化の場として描くが、それは仏教の殺生戒と深く関わっている。漁民の側の恐怖や不安に対する救済を語ることにより、仏教は社会や人々の生活と融合しながら浸透していった。

以上、「人」「思想」「空間認識」という三つの視点から、『靈異記』が書かれた時代の人々が物事をどう考え、何に関心を持ったかということについて考察を試みていった。これらの論考はまるで衛星のように『靈異記』の周辺をめぐるだけに見えるかも知れない。しかし、周縁的なことをやることによって浮かび上がってくるものもある。本稿はそうした手法によって時代の問題を浮き彫りにしようとしたものである。